

編集後記

『企業家研究』第24号では、「論説」1本、「特集」5本、「書評」6本に加えて、「FES 便り」、「私の企業家研究」、及び「学会記事」を掲載します。

「論説」に掲載されたのは、企業家活動としての助産師の独立開業に関する論考です。本稿では、指導者であり雇用者である先輩助産師がロールモデルとなり、弟子の助産師が技能伝承の過程で企業家として成長し、彼女らの企業家活動に繋がる経緯が事例を通して描かれます。「企業家がいかにして企業家となるのか」という企業家研究の本質的問いに迫る論考です。

また、今号では「特集」論文が掲載されています。今回の特集テーマは、「企業史料の保存と利活用」としました。デジタル文書資料が増加する一方、企業史料の収集のきっかけとなる社史編纂の企業での取り組みが縮小する今日、企業史料の利活用を取り巻く状況は転機を迎えつつある、との問題意識を踏まえた企画となります。今回の特集で特筆すべき点は、掲載された論文は5本（内訳は、寄稿論文4本と査読付き論文1本）あり、企業史料の利活用についての俯瞰図を提示する内容となっていることです。

「書評」では、歴史学、経営学、社会学に及ぶ多彩な領域を網羅した6冊の書籍が紹介されています。厳選された書籍を厳選された評者が紹介していますので、良書との出会いのきっかけとしていただければ幸いです。

「FES 便り」では、企業家ミュージアム（大阪商工会議所）との共同開催事業である「講座・企業家学」と「企業家に聞く」の実施状況を交替で紹介してきました。今回は、2023年度に開催された3回の「企業家に聞く」の概要を掲載する順番となります。経営者の講演と研究者のインタビューを組み合わせるという本企画の面白さは、「FES 便り」の簡潔な記載からも容易に読み取っていただけるのではないのでしょうか。

「私の企業家研究」では、企業家の「先見性」

と「達人性」を探究する方法論についての論考が展開されます。研究テーマを考える際に、方法論的制約からそれと気づかずに本質的問いを回避することは意外に多いと思います。本論考は、こうした問題意識に応えるものであり、企業家とは何かを考えるうえでの貴重な気づきが得られます。

「学会記事」の中の「会報報告」では、学会誌の掲載内容、学会の開催状況、「講座・企業家学」、および、「企業家に聞く」の実施状況等、2023年度の学会活動の状況をまとめています。

以上を内容とする『企業家研究』第24号は、現在の編集委員会が担当する最後の号となります。現委員会の任期中の大きな出来事としては、それ以前の年1回の学会誌刊行から夏号（7月刊行）と冬号（2月刊行）の年2回の刊行体制へ移行したことがあります。その結果、投稿の利便性は大いに向上しましたが、査読等で学会員の皆様にも協力を依頼する機会も増えました。最後になりますが、そうした折にも快く依頼をお引き受けいただいた方々に、この場をかりてお礼を申し上げます。

（伊藤 博之）